

厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）

「世帯構造の変化が社会保障に与える影響の分析研究」

分担研究報告書

「頼れる人の有無と単身高齢者の暮らし向き」

研究分担者 藤間 公太（国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部）

要旨

目的：本研究の目的は、何らかの生活ニーズが生じた際に頼れる人がいること（「頼れる人の有無」）と単身高齢世帯で暮らす者（単身高齢者）の暮らし向きとの関連、およびそのジェンダー差について検討することである。

方法：「第2回 生活と支え合いに関する調査」の個票データを用いた分析結果にもとづき、議論する。具体的には、「重要な事柄の相談」「愚痴を聞いてくれること」「喜びや悲しみを分かち合うこと」「いざという時のお金の援助」「日頃のちょっとした手助け」「日頃のちょっとした手助け」の5項目についての「頼れる人の有無」および「頼れる人は誰か」が、単身高齢者の暮らし向きにどのような影響を与えているのかについて検討する。

結果：説明変数については、一貫した効果を看取することはできなかった。「頼れる人の有無」の効果についての分析では、説明変数のみを投入した場合、いずれの項目についても「いない」の有意な負の効果が示されたものの、共変量を統制した場合、その効果は消失するか維持されるかは、項目によって異なっていた。また、「頼れる人は誰か」についても、説明変数の効果は一貫したものではなかった。

考察：第1に、いずれの分析についても、等価世帯所得は一貫して有意な正の効果を示していた。このことは、「頼れる人の有無」や「頼れる人は誰か」といった事柄よりも、世帯所得が直接的に暮らし向きに影響を与えていることを意味するものである。第2に、「頼れる人がいる」と回答しているものに限定してみても、「家族・親族」の効果はそこまで頑健ではない。少なくともこの分析結果にもとづけば、家族や親族を頼れることは単身高齢者個人の暮らし向きの改善につながるものとはいえない。第3に、男性の場合、全ての分析において会話頻度が「4～7日」が有意な負の効果が示された。この会話頻度の効果については、それぞれの値に含まれるのがどのような層なのかを考える必要があるのかもしれない。

結論：まず、単身高齢者の暮らし向きを改善させる施策としては、経済的な支援を優先して拡充することが有効でありうる。次に、家族や親族は単身高齢者の暮らし向きを改善させるのに有効な存在とは必ずしもいえない。最後に、1週間に「4～7日」他人と話をしている層について、その社会経済的な状況をより詳細に分析する必要がある。

A 研究の目的

(1) はじめに

本研究の目的は、何らかの生活ニーズが生じた際に頼れる人がいること（以下、「頼れる人の有無」と単身高齢世帯で暮らす者（以下、単身高齢者）の暮らし向きとの関連を検討することである。

日本が世界有数の超高齢社会であることは論をまたないだろう。日本における高齢化率¹は、1970年に7%、1994年に14%、2007年に21%を超え²、その後も右肩上がりの上昇を続け、2018年には28.5%に達している（図1）。このように高齢化率が急速に伸びた背景には、少子化が進む中で高齢化人口が増え続けたことがある。

高齢化率の上昇は、社会保障や社会福祉サービスにさまざまな課題をもたらす。サービス受給者である高齢者の比率が大きくなることは、現役世代への負担の増大につながりうる。「平成28年版厚生労働白書」によると、1950年時点では65歳以上の高齢者1人を10人の現役世代で支えていたのが、2015年には高齢者1人に対して現役世代2.1人へと急激に減少しており、さらに2050年には1.2人の現役世代で65歳以上の高齢者を支える状況になると予想されている（厚生労働省2016:7）。それゆえ、働く意欲のある高齢者が働き続けられる「生涯現役社会」の実現や、地域社会におけるネットワークの中で高齢者の生活を支える仕組みが模索されている。

一方で、「全人口に占める高齢者の割合が

増加していくという社会レベルの問題の位相と、高齢者個人が日常生活の中で抱える問題の位相は大きく異なる」（宍戸2001:135）。高齢化をめぐる問題とは日常生活で「個人レベル」の困難を経験する高齢者が「社会レベル」で増えていることであるため、両者はもちろん無関係ではないのだが、「社会レベル」での対応を考える上では、まず「個人レベル」の状況を把握しておくことが欠かせない。

なかでも本稿が着目するのは、単身高齢者である。近年単身高齢者が増加している背景には（1）非婚化および離婚、死別の増加、（2）年金制度の整備による、高齢者の相対的な自立の2つがあると指摘されている（上野2015）。日本においては、同居する家族が高齢者の生活を支える「含み資産」（厚生省1978）とみなされてきたが、単身高齢者にはその同居家族がいない。それゆえ、生活を維持していくためには、自助、公助、共助、あるいは地域社会や友人関係における互助など、何らかの代替的な手段が必要となる。また、かつての高齢者のネットワークは子どもへの依存度が大きかったが（藤崎1998）³、近年では公的年金制度の影響もあり、高齢の親が相対的に自立してきていると指摘されている（稲葉ほか2016）。それゆえ、単身高齢者は今後も増えていくと予想されるが、それに対応する社会保障制度のあり方を考える上では、現状、単身高齢者がどのようなサポート・ネットワークを有しており、そのことは単身高齢者の暮らし向きにどのように影響しているのかを、俯瞰的に把握しておくことは有用

¹ 65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合をさす。

² それぞれ、国際連合による「高齢化社会」、「高齢社会」、「超高齢社会」の定義に相当。

³ 成人子と親との援助関係については、俣野(2018)が詳細なレビューを行っている。

であろう。

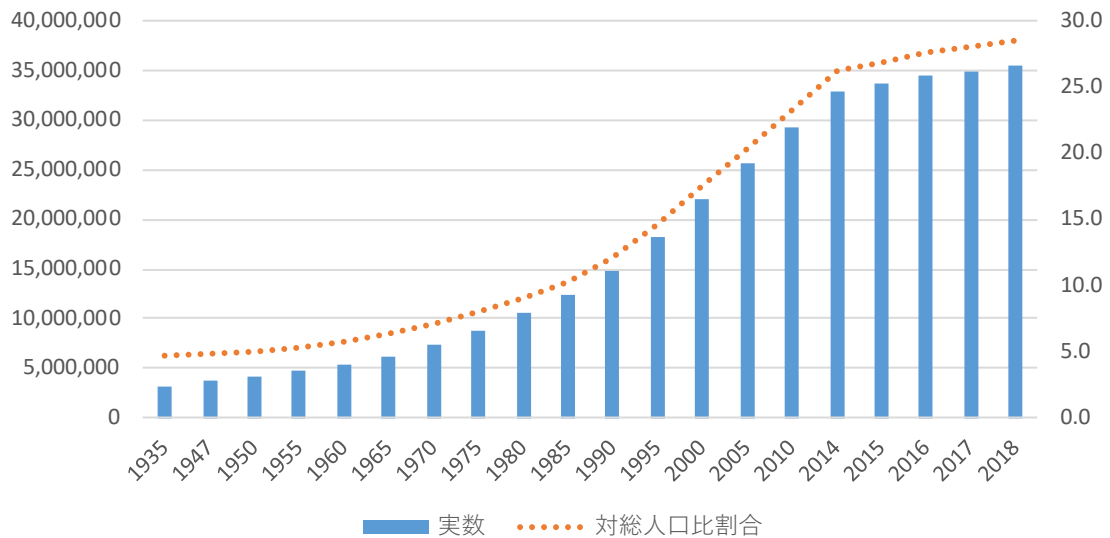


図1 65歳以上人口の推移

(2) 先行研究

単身高齢者についての議論でもっとも注目を集めたものの1つとして、上野千鶴子による「おひとりさま」論が挙げられる(上野 2007, 2009, 2012, 2015)。一連の論考のなかで、上野は異性間の婚姻にもとづくパートナー関係がもはや老後の生活を保障するものではなくなったことを強調する。その上で上野が重要視するのが、グチをこぼしたり弱音を吐くことができる友人間のネットワークである(上野 2007: 138-42, 247-8)。この上野の議論は、老後をひとりで暮らすことを前提に、情緒的なサポートを友人間で提供し合うことを想定するものである⁴。

⁴ 介護に議論を限定すれば、「(1) 私的セクター(家族: 筆者注)における選択の自由に加えて、(2) ケアの社会化については市場化オプションをさけることがのぞましく、(3) ケア費用については国家化が、(4) ケア労働については協セクター(市民事業体: 筆者注)への分配が、福祉社会の『最

上野の「おひとりさま」論以前より、高齢者のネットワークと、そこから提供されるサポートについては、さまざまな研究がなされている。とりわけ1990年代以降、「集団としての『家』が所与のものとして考えられない現在……家族という集団の内部に包摂された高齢者から、ネットワークを主体的に形成する高齢者としてとらえていく視点が必要である」(宍戸 2001: 137)という事情を背景に、高齢者のネットワーク⁵に

適混合』についての現時点での最適解である」と上野は述べる(上野 2011: 237)。⁵ ネットワークに関しては広義、狭義の2つの概念がある。社会的ネットワークは「個人間(人與人)の紐帯のみではなく、制度間、機関間、集団間、人と制度・機関・集団も含める」広義の概念である。一方、パーソナル・ネットワークは「分析単位を『個人』と限定し、さらにその個人の結び結ぶ『総合的、相対的、集会的、横断的』な関係、紐帯を分析することを志向している」狭義の概念である(宍戸 2001: 138)。

ついでの研究が蓄積されている。

いくつかの先行研究においては、高齢者が有するネットワークの構造的側面（規模や接触頻度、種類）、ネットワークがもたらす情緒的、手段的なサポート機能、およびネットワークの構造と機能の関心に関心が向けられてきた。たとえば、岡山市内の高齢女性のネットワークを分析した野辺によると、単身の女性は多くの友人関係を取り結ぶことで親族関係の少なさを補完していること、また、単身の女性は当然ながら同居家族からのサポートを入手できないものの、友人からのサポートを入手することでそれを補完することが明らかにされている（野辺 1997）。また、「第1回全国家庭動向調査データ」（1993年）を用いた白波瀬（2005）によると、調査対象者である女性本人の母親へのサポート提供か、夫の母親へのサポート提供かによって、また、それぞれに提供するサポートの種類によって、規定要因が異なることが示されている。それによると、本人の母親への経済的支援を提供する際には、母親の世帯構造が、世話的な支援については母親が健康かどうか重要である一方、夫の母親については、経済的支援、世話的支援ともに、夫が長男か否か、世帯収入が高いかどうか重要であった。加えて、東京都世田谷区で実施された「地域の生活課題と住民力に関する調査'09」（2009年）を用いた小山（2012）によると、高齢者の地域参加はネットワーク量を増やす効果を持つこと、地域参加を行っている高齢者ほど、地域の中に支援を期待できる人を有していることが示されている。

高齢者のネットワークやサポートと、心身の健康との関連も、先行研究における重

要なテーマである。日本国内でのこの研究領域において早くから共通して指摘されていたことは、ポジティブなサポートを受けることが抑うつ傾向を低め、逆にネガティブなサポートを受けることが抑うつ傾向を高めることである（村岡ほか 1996; 青木 1997; Hashimoto et al 1999）。これらの多くは方法論的な限界から抑うつと諸要因との関連が厳密に把握されていない場合が多いとの課題も指摘されていたが（増地・岸 2001）、その後も高齢者のネットワーク、サポートと心身の健康については議論が展開されている。宮城県で実施された地域住民の生活習慣病予防における健康行動と健康行動にかかわるサポートの関連性についての調査研究では、壮年期に男性については精神的な支援提供者の存在が、高齢の女性では運動についての支援者の存在が、健康行動に効果的に作用する可能性が示唆されている（高橋ほか 2008）。また、埼玉県和光市で実施された調査研究からは、同居家族以外との接触頻度が低い「孤立高齢者」は、同居者の有無にかかわらず、私的・公的なサポートを得ることが難しく、高い抑うつ傾向や将来への不安を抱えていることが示されている（小林ほか 2011）。

ネットワークやサポート、およびその効果における性差についても議論がなされている。岡山市内において高齢男性と高齢女性が組織するネットワークの差異を検討した研究によると、高齢男性は高齢女性よりもネットワークの中に配偶者を含めていること、高齢男性は高齢女性よりも多くの職場仲間関係を組織していること、高齢女性は高齢男性よりも多くの近隣関係を組織していること、高齢男性は配偶者と職場仲間

からサポートを入手できたが、高齢女性は親族と近隣者にサポートを求めやすいことが報告されている（野辺 1999）。また、東京墨田区に居住する 75 歳以上の在宅高齢者を対象に、ネットワークが精神的健康に及ぼす影響を検討した研究もある。それによると (1) 男性では配偶者がいるものほどディストレスが低く、生活満足度が高い傾向が示されたが、女性では配偶者の存在は有意な効果を持たないこと、(2) 女性では、子どもがいるものほどディストレスが低く、生活満足度が高い傾向が示されたが、男性では子どもの存在は有意な効果を示さないこと、(3) 男性では近距離友人ネットワークが生活満足度を高め、女性では中遠距離親族ネットワークがディストレスを低め、生活満足度を高める効果があること、(4) 女性では、地域集団参加者数が多いものほどディストレスが低く、生活満足度が高いこと、が示されている（原田ほか 2005）。さらに、前出の小山（2012）においても、地域参加以外でネットワークの多寡に影響を及ぼす要因として、男性では子どもの有無が、女性では主観的健康観が効果を有しているという結果が示されている。小山自身はこの結果を、男性にとっては婚姻関係の有無、女性にとっては友人関係形成の機会が、社会的孤立を防ぐために重要であるという石田（2011）の議論と通じるものであると解釈している。ただし、これらの性差は普遍的なものでは可能性もあることには注意が必要である。全国高齢者縦断調査データを用いた小林・Liang（2011）は、社会的ネットワークの男女差は、コホートが経験したライフコースによって変わりうることを示している。また、ネットワークが

高齢者の主観的ウェルビーイングに与える影響について、性別と年齢による差異を検討した小林ほか（2014）においても、後期高齢者に関しては前期高齢者よりも性差がみられなくなったことが示されている。

このように高齢者が有するネットワークやサポートについてさまざまな議論がなされているものの、それらが暮らし向きに与える影響を直接的に検討したものは意外にも見当たらない。もちろん、ネットワークやサポートが心身の健康に影響を与えるという一連の議論を踏まえれば、「サポートによって心身の健康が回復したことで暮らし向きも向上しうるのではないか」という媒介的な効果の仮説を直観的に導くことは可能である。とはいえ、「高齢化と社会保障」という社会レベルの問題を考える上では、「頼れる人の有無と暮らし向き」という「個人レベル」の状況を検討しておくことは有用であろう。

B 研究の方法

(1) データ

本稿では、「第 2 回 生活と支え合いに関する調査」の個票データを用いた分析結果にもとづき、議論を行う。具体的には、居住環境、世帯の生活状況、個人の生活状況それぞれに関する相対的剥奪スコアと世帯構造との関連についての分析の部分を用いる。

「第 2 回 生活と支え合いに関する調査」は、「人々の生活、家族関係と社会経済状態の実態、社会保障給付などの公的な給付と、社会的ネットワークなどの私的な支援が果たしている機能を精査し、年金、医療・介護などの社会保障制度の喫緊の課題のみな

らずその長期的なあり方、社会保障制度の利用と密接に関わる個人の社会参加のあり方を検討するための基礎的資料を得ることを目的としたものである（国立社会保障・人口問題研究所 2018: 1）。

調査対象は、「厚生労働省が実施する『平成 29 年国民生活基礎調査』で全国を対象に設定された調査地区（1,106 地区）内から無作為に選ばれた調査地区（300 地区）内に居住する世帯主および 18 歳以上の個人」であり、「平成 29 年 7 月 1 日現在の世帯の状況（世帯票）および個人の状況（個人票）」について調査された。「調査方法は配票自計、密封回収方式による。その結果、世帯票の配布数（世帯票の調査客体数）16,341 票に対して、回収票数は 10,959 票、有効票数は 10,369 票であった（回収率 67.1%、有効回収率 63.5%）。また、対象世帯の 18 歳以上の個人に配布した個人票の配布数（個人票の調査客体数）26,383 票に対して、回収票数は 22,800 票であった（回収率 86.4%）。ただし、回収票のうち重要な情報が抜けている 3,000 票は無効票として集計対象から除外したため、有効票数は 19,800 票、有効回収率は 75.0%となった」（国立社会保障・人口問題研究所 2018: 1）。

本調査では、「子どもの世話や看病」「（子ども以外の）介護や看病」「重要な事柄の相談」「愚痴を聞いてくれること」「喜びや悲しみを分かち合うこと」「いざという時のお金の援助」「日頃のちょっとした手助け」「家を借りるときの保証人を頼むこと」「成年後見人・保佐人を頼むこと」の 9 項目について、「頼れる人の有無」を「いる」「いない」「そのことでは人を頼らない」の 3 つの選択肢でたずねている。さらに、「いる」と回

答した者に対して、それが誰かを「家族・親族」「友人」「知人」「近所の人」「職場の人」「民生委員・福祉の人」「その他の人」から複数回答で尋ねている。このようにサポートの受給状況と提供者を細分化して尋ねているため、回答者が有するサポート・ネットワークの受給と暮らし向きに関連について、先行研究での議論との比較可能性を担保しながら検討することができる。

なお、本稿では単身高齢者の暮らし向きについて検討することを目的としているため、世帯タイプが「単独高齢男性」あるいは「単独高齢女性」に該当する 65 歳以上の者にサンプルを限定して分析を行う。

（2）使用する変数

被説明変数は、回答者の調査時（2017 年 7 月）現在の暮らし向きである。5 件法（「1 大変ゆとりがある」「2 ややゆとりがある」「3 普通」「4 やや苦しい」「5 大変苦しい」）で尋ねられている項目を反転させ、「1 大変苦しい」から「5 大変ゆとりがある」までの値を与えた。

説明変数は、前述した「頼れる人の有無」についての質問のうち、「重要な事柄の相談」「愚痴を聞いてくれること」「喜びや悲しみを分かち合うこと」「いざという時のお金の援助」「日頃のちょっとした手助け」「日頃のちょっとした手助け」の 5 項目についての回答選択肢を用いる。すなわち、「頼れる人がいない」「そのことでは人を頼らない」「家族・親族」「友人」「知人」「近所の人」「職場の人」「民生委員・福祉の人」「その他の人」の 9 項目である。それぞれについて選択している場合に「1」、そうでない場合に「0」を取るダミー変数を作成した。

共変量として、女性ダミー（男性=0、女性=1）、就労状況（就業【ref】、失業中、非就労）、年齢階級（65～69歳【ref】、70歳代、80歳代、90歳代）、婚姻状況（未婚、既婚【ref】、死別、離別）、普段他者と会話する頻度（ほとんど話をしない、1ヶ月に1

回、2週間に1回、4～7日（1週間）に1回、2～3日に1回、毎日【ref】）、過去1ヶ月の会話人数（0人、1～4人、5～9人、10～20人、21～49人、50人以上【ref】）を統制する。

以上の変数の記述統計量を表1に示す。

表1 使用する変数の記述統計量

変数名	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)			
	平均値	標準偏差	最大値	最小値	平均値	標準偏差	最大値	最小値	平均値	標準偏差	最大値	最小値
現在の暮らし向き												
大変苦しい	0.098	0.297	0	1	0.119	0.325	0	1	0.084	0.277	0	1
やや苦しい	0.287	0.453	0	1	0.323	0.468	0	1	0.265	0.442	0	1
普通	0.538	0.499	0	1	0.491	0.501	0	1	0.568	0.496	0	1
ややゆとりがある	0.065	0.246	0	1	0.063	0.244	0	1	0.066	0.248	0	1
大変ゆとりがある	0.012	0.111	0	1	0.004	0.059	0	1	0.018	0.133	0	1
頼れる人の有無												
重要な事柄の相談												
いる	0.740	0.439	0	1	0.632	0.483	0	1	0.810	0.393	0	1
家族・親族	0.664	0.473	0	1	0.540	0.499	0	1	0.744	0.437	0	1
友人・知人	0.195	0.397	0	1	0.186	0.390	0	1	0.201	0.401	0	1
近所の人	0.021	0.142	0	1	0.014	0.118	0	1	0.025	0.156	0	1
職場の人	0.007	0.083	0	1	0.004	0.059	0	1	0.009	0.095	0	1
民生委員・福祉の人	0.029	0.168	0	1	0.039	0.193	0	1	0.023	0.149	0	1
その他	0.017	0.127	0	1	0.025	0.155	0	1	0.011	0.106	0	1
いない	0.142	0.349	0	1	0.218	0.413	0	1	0.093	0.290	0	1
頼らない	0.059	0.236	0	1	0.084	0.278	0	1	0.043	0.203	0	1
愚痴を聞いてくれる												
いる	0.678	0.468	0	1	0.484	0.501	0	1	0.803	0.398	0	1
家族・親族	0.488	0.500	0	1	0.305	0.461	0	1	0.606	0.489	0	1
友人・知人	0.407	0.492	0	1	0.242	0.429	0	1	0.514	0.500	0	1
近所の人	0.077	0.267	0	1	0.021	0.144	0	1	0.113	0.317	0	1
職場の人	0.019	0.138	0	1	0.014	0.118	0	1	0.023	0.149	0	1
民生委員・福祉の人	0.021	0.142	0	1	0.021	0.144	0	1	0.020	0.141	0	1
その他	0.025	0.155	0	1	0.035	0.184	0	1	0.018	0.133	0	1
いない	0.165	0.371	0	1	0.288	0.453	0	1	0.086	0.281	0	1
頼らない	0.103	0.304	0	1	0.158	0.365	0	1	0.068	0.252	0	1
喜びや悲しみを分かち合う												
いる	0.726	0.446	0	1	0.551	0.498	0	1	0.839	0.368	0	1
家族・親族	0.611	0.488	0	1	0.439	0.497	0	1	0.722	0.449	0	1
友人・知人	0.398	0.490	0	1	0.256	0.437	0	1	0.489	0.500	0	1
近所の人	0.072	0.258	0	1	0.028	0.165	0	1	0.100	0.300	0	1
職場の人	0.017	0.127	0	1	0.011	0.102	0	1	0.020	0.141	0	1
民生委員・福祉の人	0.012	0.111	0	1	0.007	0.084	0	1	0.016	0.125	0	1
その他	0.021	0.142	0	1	0.021	0.144	0	1	0.020	0.141	0	1
いない	0.168	0.374	0	1	0.291	0.455	0	1	0.088	0.284	0	1
頼らない	0.055	0.228	0	1	0.091	0.288	0	1	0.032	0.175	0	1
いざという時のお金の援助												
いる	0.351	0.478	0	1	0.305	0.461	0	1	0.380	0.486	0	1
家族・親族	0.331	0.471	0	1	0.277	0.448	0	1	0.367	0.482	0	1
友人・知人	0.026	0.160	0	1	0.028	0.165	0	1	0.025	0.156	0	1
近所の人	0.001	0.037	0	1	0.000	0.000	0	0	0.002	0.048	0	1
職場の人	0.000	0.000	0	0	0.000	0.000	0	0	0.000	0.000	0	0
民生委員・福祉の人	0.006	0.074	0	1	0.011	0.102	0	1	0.002	0.048	0	1
その他	0.001	0.037	0	1	0.000	0.000	0	0	0.002	0.048	0	1
いない	0.256	0.437	0	1	0.382	0.487	0	1	0.174	0.380	0	1
頼らない	0.344	0.475	0	1	0.256	0.437	0	1	0.400	0.491	0	1

表1 使用する変数の記述統計量 (続き)

日常のちょっとした手助け												
いる	0.669	0.471	0	1	0.519	0.501	0	1	0.765	0.425	0	1
家族・親族	0.525	0.500	0	1	0.375	0.485	0	1	0.622	0.485	0	1
友人・知人	0.275	0.447	0	1	0.228	0.420	0	1	0.305	0.461	0	1
近所の人	0.202	0.402	0	1	0.130	0.337	0	1	0.249	0.433	0	1
職場の人	0.014	0.117	0	1	0.018	0.132	0	1	0.011	0.106	0	1
民生委員・福祉の人	0.039	0.193	0	1	0.046	0.209	0	1	0.034	0.181	0	1
その他	0.019	0.138	0	1	0.018	0.132	0	1	0.020	0.141	0	1
いない	0.169	0.375	0	1	0.288	0.453	0	1	0.093	0.290	0	1
頼らない	0.111	0.315	0	1	0.137	0.344	0	1	0.095	0.294	0	1
女性ダミー	0.608	0.489	0	1								
等価世帯所得（対数）	2.716	4.184	-4.605	7.601	2.837	4.252	-4.605	6.908	2.637	4.142	-4.605	7.601
就労状況												
就業	0.234	0.424	0	1	0.309	0.463	0	1	0.186	0.389	0	1
失業中	0.089	0.286	0	1	0.112	0.316	0	1	0.075	0.263	0	1
非就労	0.677	0.468	0	1	0.579	0.495	0	1	0.740	0.439	0	1
年齢階級												
65～69歳	0.334	0.472	0	1	0.411	0.493	0	1	0.285	0.452	0	1
70歳代	0.411	0.493	0	1	0.411	0.493	0	1	0.389	0.488	0	1
80歳代	0.144	0.352	0	1	0.144	0.352	0	1	0.281	0.450	0	1
90歳代	0.035	0.184	0	1	0.035	0.184	0	1	0.045	0.208	0	1
婚姻状況												
未婚	0.191	0.394	0	1	0.277	0.448	0	1	0.136	0.343	0	1
既婚	0.048	0.214	0	1	0.098	0.298	0	1	0.016	0.125	0	1
死別	0.553	0.498	0	1	0.351	0.478	0	1	0.683	0.466	0	1
離別	0.208	0.406	0	1	0.274	0.447	0	1	0.165	0.372	0	1
会話頻度												
ほとんど話をしない	0.054	0.225	0	1	0.074	0.262	0	1	0.041	0.198	0	1
1か月に1回	0.018	0.133	0	1	0.032	0.175	0	1	0.009	0.095	0	1
2週間に1回	0.015	0.122	0	1	0.021	0.144	0	1	0.011	0.106	0	1
4～7日（1週間）に1回	0.080	0.271	0	1	0.112	0.316	0	1	0.059	0.236	0	1
2～3日に1回	0.241	0.428	0	1	0.232	0.423	0	1	0.247	0.432	0	1
毎日	0.593	0.492	0	1	0.530	0.500	0	1	0.633	0.482	0	1
会話人数												
0人	0.007	0.083	0	1	0.014	0.118	0	1	0.002	0.048	0	1
1～4人	0.168	0.374	0	1	0.225	0.418	0	1	0.131	0.338	0	1
5～9人	0.228	0.420	0	1	0.218	0.413	0	1	0.235	0.425	0	1
10～20人	0.352	0.478	0	1	0.330	0.471	0	1	0.367	0.482	0	1
21～49人	0.135	0.342	0	1	0.091	0.288	0	1	0.163	0.370	0	1
50人以上	0.110	0.313	0	1	0.123	0.329	0	1	0.102	0.303	0	1

全般的な傾向としては、以下の3点が指摘できよう。まず、現在の暮らし向きについては、「苦しい」と回答する傾向は男性で強い。次に、「頼れる人の有無」に関しては、いずれの項目についても、「いる」と回答する傾向は男性で弱く女性で強い。最後に、頼れる人が「いる」と回答した者について、頼れる人が誰なのかをみると、男性、女性ともに「家族・親族」が選択される傾向が強く、続いて「友人・知人」が選択される傾向にある。とりわけ「いざという時

のお金の援助」に関しては、「家族・親族」以外が選択される傾向はきわめて弱い。これらの傾向は、先行研究での指摘とも整合的といえよう。

(3) 分析手順

分析方法は、現在の暮らし向きを被説明変数とした順序ロジット分析を採用する。手順は下記の通りである。

まず、「重要な事柄の相談」「愚痴を聞いてくれること」「喜びや悲しみを分かち合う

こと」「いざという時のお金の援助」「日頃のちょっとした手助け」「日頃のちょっとした手助け」それぞれについて、頼れる人がいること効果を検討する。

次に、頼れる人が「いる」場合、それが誰であることがどのような効果を持つのかを検討する。先述の通り、頼れる人が「いる」と答えた者に対しての「それは誰か」という質問は、複数回答で行われている。それゆえ、この分析においては、9つのダミー変数すべてがモデルに投入される。したがって、これらの係数は「ある項目について、該当しない(=0)場合と比較したときの該当する場合(=1)」の数值を析出することになる。

それぞれの分析において、まずは説明変数のみを投入し、次に全変数を投入する。なお、ネットワークやサポート、およびその効果には性差が存在するとの先行研究の指摘に鑑み、本稿では各分析について男女別の結果も示すこととする。示される数值は全てリストワイズ後のものである。

C 結果

1 重要な事柄の相談

1.1 「頼れる人の有無」の効果

表2は「重要な事柄の相談」に関する「頼れる人の有無」を説明変数とした分析結果を示している。

男女を同時に分析した結果からみていこう。説明変数のみを投入したモデルでは、「いない」も「頼らない」も有意な負の効果を示しており、前者の係数は後者よりもかなり大きい。共変量を投入した場合、「いない」の負の効果は有意なままであるが、「頼らない」の効果は有意ではなくなる。統制変数については、まず、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は有意な効果を示していない。年齢階級は、「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、「4～7日(1週間)に1回」と「2～3日に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

表2 「頼れる人の有無」の効果（重要な事柄の相談）

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)			
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2	
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.
頼れる人の有無（相談）												
いる (ref)												
いない	-1.278	0.214 ***	-0.837	0.232 ***	-0.876	0.288 **	-0.475	0.322	-1.637	0.326 ***	-1.324	0.351 ***
頼らない	-0.698	0.296 *	-0.200	0.311	-0.171	0.412	0.309	0.444	-1.165	0.433 **	-0.781	0.462
女性ダミー			-0.057	0.163								
等価世帯所得（対数）			0.097	0.018 ***			0.105	0.030 ***			0.104	0.025 ***
就労状況												
就業 (ref)												
失業中			0.045	0.300			0.210	0.428			-0.165	0.433
非就労			0.121	0.200			-0.019	0.296			0.101	0.284
年齢階級												
65～69歳 (ref)												
70歳代			-0.114	0.179			-0.019	0.274			-0.256	0.248
80歳代			0.388	0.227			0.528	0.424			0.238	0.283
90歳代			0.864	0.425 *			0.345	0.699			1.206	0.529 *
婚姻状況												
未婚			-0.433	0.388			-0.407	0.464			-0.446	0.771
既婚 (ref)												
死別			0.136	0.372			0.100	0.443			0.178	0.750
離別			-0.578	0.380			-0.499	0.451			-0.787	0.768
会話頻度												
ほとんど話をしない			-0.481	0.397			-0.447	0.571			-0.611	0.573
1か月に1回			0.153	0.582			0.204	0.751			-0.605	0.978
2週間に1回			-0.597	0.548			-0.396	0.790			-0.837	0.807
4～7日（1週間）に1回			-0.931	0.284 **			-1.263	0.399 **			-0.503	0.414
2～3日に1回			-0.372	0.184 *			-0.219	0.303			-0.384	0.239
毎日 (ref)												
会話人数												
0人			0.840	1.010			-0.589	1.147			4.330	2.127 *
1～4人			-0.118	0.321			-0.308	0.479			0.038	0.443
5～9人			0.066	0.289			-0.154	0.443			0.261	0.394
10～20人			0.469	0.268			-0.217	0.409			1.037	0.367 **
21～49人			0.522	0.311			0.253	0.522			0.738	0.403
50人以上 (ref)												
/cut1	-2.515	0.138	-2.351	0.459	-2.227	0.205	-2.554	0.608	-2.710	0.189	-2.281	0.834
/cut2	-0.677	0.086	-0.335	0.444	-0.411	0.139	-0.539	0.585	-0.833	0.110	-0.168	0.818
/cut3	2.339	0.141	2.943	0.466	2.489	0.244	2.613	0.614	2.276	0.173	3.313	0.842
/cut4	4.238	0.336	4.877	0.558	5.498	1.003	5.670	1.153	3.883	0.357	4.975	0.902
調整済R二乗	0.023		0.081		0.014		0.077		0.030		0.105	

*<.05, **<.01, ***<.001

男女を同時に分析した結果からみていこう。説明変数のみを投入したモデルでは、「いない」も「頼らない」も有意な負の効果を示しており、前者の係数は后者よりもかなり大きい。共変量を投入した場合、「いない」の負の効果は有意なままであるが、「頼らない」の効果は有意ではなくなる。統制変数については、まず、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況

は有意な効果を示していない。年齢階級は「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、「4～7日（1週間）に1回」と「2～3日に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

続いて、男女別の分析からは、いくつか

の性差が看取される。まず、説明変数のみを投入した場合、男性については「いない」のみが有意な負の効果を示している一方、女性については「いない」「頼らない」ともに有意な負の効果を示している。共変量を統制したモデルをみると、男性について「いない」の効果が有意でなくなる一方、女性については「いない」の負の効果は有意なままである。ただし、女性について「頼らない」の効果の有意性は消失している。統制変数については、男女ともに等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は、男女ともに有意な効果を示していない。年齢階級は、女性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。会話頻度は、男性についてのみ、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、女性についてのみ「0人」と「10～20人」が「50人以上」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。この会話人数に関する結果は、「会話人数が少ない人ほど現在の暮らし向きが良い」という推定を示すものであり、少々意外といえるかも知れない。

1.2 「頼れる人は誰か」の効果

続いて、頼れる人がいる場合について、「頼れる人は誰か」の効果を確認していこう。表3が、当該変数を説明変数とした場合の結果である。

まず、男女を同時に分析した結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、「家

族・親族」のみが有意な正の効果を示している。共変量を投入しても、有意性は弱まる者のこの変数の正の効果は残っている。統制変数については、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は有意な効果を示していない。年齢階級は、「80歳代」と「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、「4～7日（1週間）に1回」と「2～3日に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

次に、男女別の分析である。説明変数のみを投入した場合、男性、女性ともに「家族・親族」のみが有意な正の効果を示している。共変量を統制したモデルをみると、男性の場合は、この正の効果の有意性が消失する一方、女性については効果は有意なままである。統制変数については、男女ともに等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は、男女ともに有意な効果を示していない。年齢階級は、女性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。会話頻度は、男性についてのみ、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、女性についてのみ「10～20人」が「50人以上」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。

表3 「頼れる人は誰か」の効果（重要な事柄の相談）

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)								
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2						
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.					
頼れる人は誰か（相談）																	
家族・親族	0.889	0.155	***	0.435	0.170	*	0.651	0.233	**	0.285	0.261	1.039	0.215	***	0.679	0.232	***
友人・知人	0.216	0.186		0.188	0.198		-0.306	0.286		-0.374	0.303	0.609	0.248	*	0.615	0.268	*
近所の人	0.491	0.517		0.530	0.527		0.520	0.924		0.158	0.975	0.355	0.632		0.567	0.637	
職場の人	-0.312	0.805		-0.630	0.824		1.176	1.836		0.223	1.963	-0.833	0.901		-0.674	0.938	
民生委員・福祉の人	-0.531	0.419		-0.467	0.440		-0.700	0.591		-0.141	0.641	-0.394	0.613		-0.679	0.651	
その他	-0.409	0.549		-0.240	0.595		-0.045	0.723		-0.392	0.763	-0.537	0.856		0.074	0.958	
女性ダミー				-0.054	0.164												
等価世帯所得（対数）				0.092	0.019	***				0.105	0.030	**			0.094	0.025	***
就労状況																	
就業(ref)																	
失業中				0.016	0.304					0.286	0.432				-0.221	0.443	
非就労				0.050	0.202					-0.020	0.305				0.065	0.288	
年齢階級																	
65～69歳(ref)																	
70歳代				-0.084	0.180					0.050	0.276				-0.250	0.249	
80歳代				0.494	0.229	*				0.568	0.432				0.377	0.289	
90歳代				0.980	0.426	*				0.271	0.710				1.296	0.531	*
婚姻状況																	
未婚				-0.366	0.392					-0.376	0.470				-0.294	0.782	
既婚(ref)																	
死別				0.182	0.374					0.142	0.447				0.355	0.758	
離別				-0.476	0.385					-0.404	0.460				-0.534	0.776	
会話頻度																	
ほとんど話をしない				-0.583	0.396					-0.670	0.571				-0.568	0.576	
1か月に1回				-0.021	0.575					-0.050	0.739				-0.378	0.984	
2週間に1回				-0.488	0.550					-0.356	0.786				-0.714	0.824	
4～7日（1週間）に1回				-0.893	0.285	**				-1.222	0.400	**			-0.504	0.427	
2～3日に1回				-0.335	0.185	*				-0.197	0.304				-0.410	0.238	
毎日(ref)																	
会話人数																	
0人				0.667	1.012					-0.585	1.157				3.744	2.126	
1～4人				-0.124	0.322					-0.292	0.484				-0.044	0.444	
5～9人				0.044	0.290					-0.219	0.446				0.287	0.398	
10～20人				0.472	0.268					-0.232	0.411				1.058	0.370	**
21～49人				0.488	0.311					0.239	0.523				0.665	0.406	
50人以上(ref)																	
/cut1	-1.682	0.155		-1.867	0.470		-1.773	0.222		-2.353	0.631		-1.625	0.221	-1.335	0.848	
/cut2	0.148	0.131		0.135	0.459		0.051	0.182		-0.344	0.612		0.230	0.189	0.756	0.840	
/cut3	3.191	0.187		3.425	0.484		2.992	0.284		2.831	0.644		3.387	0.258	4.271	0.871	
/cut4	5.093	0.359		5.360	0.574		6.002	1.014		5.887	1.168		5.002	0.407	5.940	0.930	
調整済R二乗	0.025			0.080			0.018			0.077			0.033		0.106		

*<.05, **<.01, ***<.001

2 愚痴を聞いてくれる

2.1 「頼れる人の有無」の効果

表4は「重要な事柄の相談」に関する「頼

れる人の有無」を説明変数とした分析結果を示している。

表4 「頼れる人の有無」の効果（愚痴を聞いてくれる）

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)			
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2	
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.
頼れる人の有無 (愚痴)												
いる (ref)												
いない	-0.929	0.197 ***	-0.382	0.230	-0.650	0.262 *	-0.213	0.302	-1.036	0.334 **	-0.578	0.377
頼らない	-0.260	0.229	0.105	0.249	0.414	0.322	0.650	0.349	-0.913	0.339 **	-0.522	0.380
女性ダミー			-0.050	0.167								
等価世帯所得 (対数)			0.097	0.018 ***			0.101	0.030 **			0.098	0.025 ***
就労状況												
就業 (ref)												
失業中			-0.001	0.299			0.168	0.428			-0.265	0.429
非就労			0.107	0.199			-0.037	0.296			0.092	0.284
年齢階級												
65~69歳 (ref)												
70歳代			-0.126	0.180			-0.043	0.276			-0.256	0.247
80歳代			0.398	0.227			0.533	0.427			0.283	0.283
90歳代			0.923	0.423 *			0.464	0.699			1.259	0.527 *
婚姻状況												
未婚			-0.416	0.391			-0.363	0.469			-0.254	0.802
既婚 (ref)												
死別			0.184	0.374			0.139	0.446			0.361	0.778
離別			-0.580	0.382			-0.526	0.455			-0.611	0.797
会話頻度												
ほとんど話をしない			-0.591	0.404			-0.575	0.584			-0.689	0.582
1か月に1回			0.096	0.582			0.158	0.756			0.041	1.011
2週間に1回			-0.632	0.546			-0.270	0.796			-0.804	0.798
4~7日 (1週間) に1回			-0.916	0.286 **			-1.246	0.397 **			-0.414	0.420
2~3日に1回			-0.356	0.185			-0.173	0.304			-0.408	0.237
毎日 (ref)												
会話人数												
0人			0.588	1.001			-0.743	1.139			3.583	2.116
1~4人			-0.175	0.320			-0.381	0.479			-0.156	0.442
5~9人			0.023	0.288			-0.230	0.442			0.123	0.393
10~20人			0.467	0.266			-0.270	0.406			0.959	0.367 *
21~49人			0.538	0.309			0.170	0.521			0.738	0.402
50人以上 (ref)												
/cut1	-2.443	0.138	-2.248	0.460	-2.152	0.214	-2.516	0.611	-2.603	0.184	-2.067	0.854
/cut2	-0.645	0.089	-0.263	0.446	-0.341	0.155	-0.494	0.587	-0.790	0.111	-0.020	0.840
/cut3	2.348	0.143	3.004	0.468	2.572	0.257	2.673	0.619	2.287	0.174	3.427	0.865
/cut4	4.247	0.337	4.938	0.560	5.589	1.007	5.734	1.154	3.892	0.358	5.088	0.923
調整済 R 二乗	0.013		0.075		0.016		0.080		0.015		0.092	

*<.05, **<.01, ***<.001

男女を同時に分析した結果からみていこう。説明変数のみを投入したモデルでは、「いない」のみが有意な負の効果を示している。共変量を投入した場合、この「いない」の負の効果は有意でなくなる。統制変数については、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は有意な効果を示していない。年齢階級は、「90歳代」が「65

~69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、「4~7日 (1週間) に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

つづいて、男女別の分析結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、男性に

については「いない」のみが有意な負の効果を示している一方、女性については「いない」「頼らない」ともに有意な負の効果を示している。また、「いない」の係数に関しては、男性についてよりも女性についてのみの方が大きい。共変量を統制した場合、男女ともに説明変数の効果は有意ではなくなる。統制変数については、男女ともに等価世帯所得が有意な正の効果を示しており、就労状況、婚姻状況は有意な効果を示していない。一方、年齢階級は、女性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。会話頻度は、男性についてのみ、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、女性についてのみ「10～20人」が「50人以上」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。

2.2 「頼れる人は誰か」の効果

続いて、「頼れる人は誰か」の効果进行分析した結果を表5に示す。

まず、男女を同時に分析した結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、「家族・親族」のみが有意な正の効果を示している。共変量を投入した場合、この変数の正の効果の有意性は消失する。統制変数に

ついては、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は有意な効果を示していない。年齢階級は、「80歳代」と「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、「4～7日（1週間）に1回」と「2～3日に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

次に、男女別の分析である。説明変数のみを投入した場合、男性、女性ともに「家族・親族」のみが有意な正の効果を示している。共変量を統制したモデルをみると、男性の場合は、この正の効果の有意性が消失する一方、女性については有意なままである。統制変数については、男女ともに等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は、男女ともに有意な効果を示していない。年齢階級は、女性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。会話頻度は、男性についてのみ、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、女性についてのみ「10～20人」が「50人以上」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。

表5 「頼れる人は誰か」の効果（愚痴を聞いてくれる）

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)									
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2							
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.						
頼れる人は誰か（愚痴）																		
家族・親族	0.766	0.150	***	0.292	0.169	0.682	0.254	**	0.280	0.286	0.787	0.195	*	0.340	0.213			
友人・知人	0.141	0.153		0.039	0.165	-0.352	0.266		-0.472	0.286	0.342	0.193		0.277	0.207			
近所の人	0.028	0.273		-0.216	0.283	-0.409	0.683		-0.422	0.745	0.050	0.304		-0.186	0.313			
職場の人	-0.470	0.496		-0.888	0.528	-0.330	0.891		-0.904	0.930	-0.636	0.605		-0.883	0.666			
民生委員・福祉の人	-0.464	0.510		-0.375	0.539	0.118	0.921		0.302	0.960	-0.786	0.619		-0.768	0.687			
その他	0.345	0.469		0.459	0.501	0.863	0.653		0.631	0.692	-0.276	0.686		0.214	0.755			
女性ダミー				-0.036	0.169													
等価世帯所得（対数）				0.096	0.019	***				0.109	0.030	***				0.0918	0.0249	***
就労状況																		
就業(ref)																		
失業中				-0.041	0.307				0.264	0.441				-0.339	0.4425			
非就労				0.013	0.205				-0.044	0.300				-0.029	0.29573			
年齢階級																		
65～69歳(ref)																		
70歳代				-0.087	0.180				0.012	0.275				-0.255	0.249			
80歳代				0.454	0.230	*				0.543	0.429				0.340	0.289		
90歳代				0.952	0.432	*				0.200	0.706				1.370	0.535	*	
婚姻状況																		
未婚				-0.385	0.393				-0.306	0.473				-0.253	0.808			
既婚(ref)																		
死別				0.202	0.375				0.238	0.449				-0.253	0.808			
離別				-0.510	0.385				-0.378	0.461								
会話頻度																		
ほとんど話をしない				-0.635	0.397				-0.719	0.566				-0.691	0.576			
1か月に1回				0.019	0.577				-0.116	0.739				0.002	1.000			
2週間に1回				-0.655	0.546				-0.388	0.787				-0.813	0.812			
4～7日（1週間）に1回				-0.901	0.286	**				-1.222	0.397	**				-0.441	0.423	
2～3日に1回				-0.365	0.186	*				-0.293	0.309				-0.421	0.239		
毎日(ref)																		
会話人数																		
0人				0.478	1.007				-0.680	1.151				-0.691	0.576			
1～4人				-0.240	0.321				-0.316	0.481				0.002	1.000			
5～9人				-0.060	0.289				-0.312	0.447				-0.813	0.812			
10～20人				0.401	0.267				-0.232	0.411				-0.441	0.423			
21～49人				0.514	0.312				0.280	0.526				-0.421	0.239			
50人以上(ref)																		
/cut1	-1.860	0.145		-2.142	0.462	-1.900	0.205		-2.474	0.619	-1.855	0.211		-1.812	0.868			
/cut2	-0.056	0.113		-0.155	0.449	-0.097	0.155		-0.467	0.598	-0.031	0.169		0.243	0.856			
/cut3	2.978	0.174		3.134	0.473	2.835	0.265		2.730	0.630	3.098	0.241		3.717	0.883			
/cut4	4.884	0.352		5.072	0.564	5.856	1.009		5.801	1.162	4.716	0.396		5.387	0.940			
調整済R二乗	0.019			0.078		0.015			0.080		0.025			0.097				

*<.05, **<.01, ***<.001

3 喜びや悲しみを分かち合うこと

3.1 「頼れる人の有無」の効果

表6は「喜びや悲しみを分かち合うこと」に関する「頼れる人の有無」を説明変数とした分析結果を示している。

男女を同時に分析した結果からみていこう。説明変数のみを投入したモデルでは、

「いない」のみが有意な負の効果を示している。共変量を投入した場合、この「いない」の負の効果は有意でなくなる。統制変数については、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は有意な効果を示していない。年齢階級は、「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の

効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリ

として有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

表6 「頼れる人の有無」の効果（喜びや悲しみを分かち合うこと）

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)								
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2						
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.					
頼れる人の有無（分かち合い）																	
いる(ref)																	
いない	-1.074	0.196	***	-0.606	0.230	**	-0.822	0.260	**	-0.390	0.301	-1.299	0.325	***	-0.989	0.379	*
頼らない	-0.705	0.294	*	-0.290	0.312	-0.387	0.375	-0.095	0.406	-1.055	0.495	*	-0.535	0.518			
女性ダミー				-0.093	0.166												
等価世帯所得（対数）				0.099	0.018	***			0.105	0.030	***				0.102	0.025	***
就労状況																	
就業(ref)																	
失業中				0.021	0.299			0.219	0.428				-0.197	0.428			
非就労				0.088	0.199			-0.040	0.295				0.091	0.282			
年齢階級																	
65～69歳(ref)																	
70歳代				-0.122	0.179			-0.012	0.274				-0.241	0.247			
80歳代				0.383	0.227			0.483	0.428				0.265	0.283			
90歳代				0.871	0.425	*			0.285	0.702				1.240	0.527	*	
婚姻状況																	
未婚				-0.370	0.391			-0.405	0.466				-0.223	0.798			
既婚(ref)																	
死別				0.201	0.373			0.116	0.444				0.443	0.773			
離別				-0.545	0.382			-0.491	0.452				-0.559	0.793			
会話頻度																	
ほとんど話をしない				-0.448	0.404			-0.444	0.574				-0.491	0.602			
1か月に1回				0.234	0.581			0.140	0.755				0.136	0.966			
2週間に1回				-0.725	0.547			-0.465	0.794				-0.972	0.799			
4～7日（1週間）に1回				-0.829	0.287	**			-1.149	0.398	**				-0.330	0.427	
2～3日に1回				-0.318	0.185			-0.173	0.304				-0.369	0.238			
毎日(ref)																	
会話人数																	
0人				0.638	1.007			-0.635	1.146				3.935	2.119			
1～4人				-0.172	0.321			-0.328	0.479				-0.039	0.444			
5～9人				-0.001	0.288			-0.232	0.443				0.177	0.393			
10～20人				0.453	0.267			-0.278	0.407				1.023	0.367	**		
21～49人				0.508	0.311			0.200	0.522				0.753	0.403			
50人以上(ref)				0.638	1.007												
/cut1	-2.506	0.138	-2.323	0.459	-2.309	0.214	-2.628	0.611	-2.613	0.184	-1.942	0.847					
/cut2	-0.687	0.088	-0.331	0.445	-0.493	0.150	-0.624	0.588	-0.782	0.108	0.123	0.833					
/cut3	2.330	0.141	2.945	0.466	2.424	0.247	2.529	0.615	2.299	0.173	3.581	0.861					
/cut4	4.230	0.336	4.881	0.559	5.436	1.004	5.582	1.153	3.905	0.357	5.243	0.919					
調整済R二乗	0.020		0.077		0.015		0.075		0.019		0.096						

*<.05, **<.01, ***<.001

つづいて、男女別の分析結果である。説明変数のみを投入した場合、男性については「いない」のみが、女性については「いない」と「頼らない」のいずれもが、有意な負の効果を示している。共変量を統制し

た場合、男性については「いない」の効果の有意性は消失する。女性については「頼らない」の効果の有意性は消失し、「いない」の有意な負の効果のみが維持される。統制変数については、男女ともに等価世帯所得

が有意な正の効果を示しており、就労状況は有意な効果を示していない。年齢階級は、女性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、男性についてのみ、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示し

ている。会話人数は、女性についてのみ「10～20人」が「50人以上」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。

3.2 「頼れる人は誰か」の効果

続いて、「頼れる人は誰か」の効果を分析した結果を表7に示す。

表7 「頼れる人は誰か」の効果（喜びや悲しみを分かち合うこと）

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)									
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2							
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.						
頼れる人は誰か (分かち合い)																		
家族・親族	0.828	0.154	***	0.373	0.174	*	0.857	0.242	***	0.574	0.280	*	0.794	0.213	***	0.362	0.232	
友人・知人	0.314	0.156	*	0.276	0.170		-0.193	0.271		-0.356	0.290		0.536	0.197	**	0.560	0.217	**
近所の人	-0.222	0.284		-0.285	0.297		0.304	0.649		0.362	0.677		-0.351	0.320		-0.375	0.341	
職場の人	-0.221	0.541		-0.372	0.572		0.267	1.078		0.158	1.135		-0.319	0.629		-0.466	0.690	
民生委員・福祉の人	0.297	0.670		0.198	0.679		2.278	1.333		2.762	1.393	*	-0.164	0.726		-0.402	0.765	
その他	0.022	0.513		-0.078	0.545		0.959	0.906		0.651	0.971		-0.403	0.629		-0.258	0.680	
女性ダミー				-0.098	0.168													
等価世帯所得 (対数)				0.094	0.019	***				0.110	0.030	***				0.092	0.025	***
就労状況																		
就業(ref)																		
失業中				-0.031	0.305					0.270	0.439					-0.363	0.439	
非就労				0.026	0.205					-0.100	0.302					0.005	0.296	
年齢階級																		
65～69歳(ref)																		
70歳代				-0.085	0.179					0.025	0.281					-0.224	0.250	
80歳代				0.456	0.229	*				0.528	0.431					0.399	0.288	
90歳代				0.932	0.430	*				-0.102	0.707					1.401	0.533	**
婚姻状況																		
未婚				-0.396	0.393					-0.350	0.478					-0.288	0.817	
既婚(ref)																		
死別				0.166	0.373					0.156	0.448					0.456	0.790	
離別				-0.527	0.384					-0.401	0.461					-0.501	0.810	
会話頻度																		
ほとんど話をしない				-0.522	0.399					-0.540	0.564					-0.606	0.594	
1か月に1回				0.084	0.573					0.104	0.744					0.049	0.979	
2週間に1回				-0.623	0.547					-0.338	0.795					-0.754	0.801	
4～7日 (1週間) に1回				-0.905	0.286	**				-1.134	0.399	**				-0.470	0.427	
2～3日に1回				-0.321	0.185					-0.169	0.308					-0.368	0.239	
毎日(ref)																		
会話人数																		
0人				0.571	1.011					-0.532	1.152					3.639	2.121	
1～4人				-0.157	0.322					-0.213	0.485					-0.082	0.441	
5～9人				-0.006	0.290					-0.201	0.445					0.136	0.394	
10～20人				0.430	0.267					-0.249	0.411					0.949	0.365	**
21～49人				0.464	0.311					0.384	0.527					0.667	0.402	
50人以上(ref)																		
/cut1				-1.970	0.468					-2.232	0.621					-1.702	0.224	
/cut2				0.020	0.457					0.132	0.164					0.130	0.190	
/cut3				3.313	0.481					3.130	0.282					3.264	0.258	
/cut4				5.252	0.571					6.187	1.018					4.880	0.407	
調整済 R 二乗	0.024			0.079			0.027			0.087			0.026			0.101		

*<.05, **<.01, ***<.001

まず、男女を同時に分析した結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、「家族・親族」と「友人・知人」が有意な正の効果を示している。統制変数を投入した場合、「友人・知人」の正の効果の有意性は消失するものの、「家族・親族」の正の効果は有意なままである。統制変数については、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は有意な効果を示していない。年齢階級は、「80歳代」と「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

次に、男女別の分析結果である。説明変数のみを投入した場合、男性については「家族・親族」のみが、女性については「家族・親族」と「友人・知人」が有意な正の効果を示している。共変量を統制したモデルをみると、男性の場合は、「家族・親族」の正の効果の有意性が維持される一方、女性については「家族・親族」の正の効果の有意性は消失し、「友人・知人」の正の効果のみが優位性を維持している。統制変数については、男女ともに等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は、男女ともに有意な効果を示していない。年齢階級は、女性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は、男女どちらについても有意な効果を示していない。会話頻度は、男性についてのみ、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話

人数は、女性についてのみ「10～20人」が「50人以上」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。

4 いざという時のお金の援助

4.1 「頼れる人の有無」の効果

表8は「いざという時のお金の援助」に関する「頼れる人の有無」を説明変数とした分析結果を示している。

まず、男女を同時に分析結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、「いない」が有意な負の効果を、「頼らない」が有意な正の効果をそれぞれ示している。共変量を投入した場合も、これらの効果の有意性は維持される。統制変数については、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は有意な効果を示していない。年齢階級は、「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

つづいて、男女別の分析結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、男性、女性ともに「いない」が有意な負の効果を、「頼らない」が有意な正の効果を示している。「いない」の負の効果は、女性についての方が係数の値が大きく、有意水準も高い。逆に「頼らない」の効果は、男性についての方が係数の値が大きく、有意水準も高い。共変量を統制した場合、男性については「いない」の負の効果が有意ではなくなり、「頼らない」の正の効果の有意性のみが維持される。女性については、「いない」の負の効

果、「頼らない」の正の効果ともに有意性が維持される。統制変数については、男女ともに等価世帯所得が有意な正の効果を示しており、就労状況、婚姻状況は有意な効果を示していない。一方、年齢階級は、女性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示し

ている。会話頻度は、男性についてのみ、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、女性についてのみ「10～20人」が「50人以上」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。

表 8 「頼れる人の有無」の効果（いざという時のお金の援助）

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)									
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2							
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.						
頼れる人の有無（お金）																		
いる(ref)																		
いない	-1.033	0.183	***	-0.674	0.201	**	-0.599	0.260	*	-0.339	0.293	-1.393	0.268	***	-0.994	0.291	**	
頼らない	0.721	0.173	***	0.717	0.179	***	1.166	0.311	***	1.166	0.328	***	0.489	0.211	*	0.532	0.221	*
女性ダミー				-0.155	0.165													
等価世帯所得（対数）				0.082	0.019	***				0.082	0.031	**				0.082	0.025	**
就労状況																		
就業(ref)																		
失業中				-0.065	0.302					0.017	0.434					-0.297	0.434	
非就労				-0.038	0.202					-0.298	0.304					-0.017	0.283	
年齢階級																		
65～69歳(ref)																		
70歳代				-0.221	0.182					-0.128	0.279					-0.345	0.250	
80歳代				0.360	0.228					0.316	0.428					0.270	0.285	
90歳代				0.923	0.424	*				0.370	0.691					1.251	0.536	*
婚姻状況																		
未婚				-0.513	0.394					-0.540	0.472					-0.094	0.806	
既婚(ref)																		
死別				0.099	0.376					0.033	0.452					0.626	0.780	
離別				-0.620	0.386					-0.666	0.460					-0.265	0.799	
会話頻度																		
ほとんど話をしない				-0.458	0.392					-0.290	0.566					-0.754	0.566	
1か月に1回				0.284	0.574					0.247	0.742					0.392	0.987	
2週間に1回				-0.643	0.551					-0.172	0.798					-0.978	0.808	
4～7日（1週間）に1回				-0.831	0.287	**				-0.994	0.403	*				-0.477	0.419	
2～3日に1回				-0.296	0.187					-0.072	0.310					-0.400	0.238	
毎日(ref)																		
会話人数																		
0人				0.553	1.016					-0.906	1.147					4.259	2.137	
1～4人				-0.114	0.323					-0.247	0.483					-0.009	0.442	
5～9人				0.036	0.288					-0.280	0.445					0.278	0.391	
10～20人				0.426	0.267					-0.338	0.412					0.981	0.365	**
21～49人				0.460	0.312					0.225	0.531					0.707	0.400	
50人以上(ref)																		
/cut1	-2.402	0.159		-2.521	0.471		-2.071	0.239		-2.796	0.640		-2.620	0.215		-1.893	0.852	
/cut2	-0.503	0.115		-0.461	0.453		-0.185	0.186		-0.728	0.611		-0.690	0.146		0.255	0.838	
/cut3	2.639	0.171		2.924	0.477		2.922	0.298		2.618	0.649		2.492	0.209		3.786	0.867	
/cut4	4.555	0.351		4.877	0.569		5.976	1.020		5.712	1.175		4.105	0.377		5.454	0.925	
調整済 R 二乗	0.049			0.099			0.051			0.105			0.047			0.115		

*<.05, **<.01, ***<.001

4.2 「頼れる人は誰か」の効果

続いて、「頼れる人は誰か」の効果进行分析

した結果を表9に示す。

表9 「頼れる人は誰か」の効果 (いざという時のお金の援助)

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)			
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2	
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.
頼れる人は誰か (お金)												
家族・親族	0.090	0.151	-0.163	0.163	-0.077	0.248	-0.283	0.275	0.137	0.192	-0.083	0.206
友人・知人	0.365	0.450	0.311	0.474	0.923	0.663	0.757	0.704	-0.047	0.606	-0.102	0.635
近所の人	0.690	1.879	-0.609	1.988	0 (omitted)	0 (omitted)	0 (omitted)	0 (omitted)	1.003	1.944	-0.391	2.086
職場の人	0 (omitted)	0 (omitted)	0.000 (omitted)	0 (omitted)	0 (omitted)	0 (omitted)	0 (omitted)	0 (omitted)	0.000 (omitted)	0.000 (omitted)	0.000 (omitted)	0.000 (omitted)
民生委員・福祉の人	-1.330	0.896	-1.265	0.922	-1.830	1.002	-1.864	1.092	0.956	1.849	1.009	2.011
その他	3.412	1.597 *	2.370	1.658	0 (omitted)	0 (omitted)	0 (omitted)	0 (omitted)	3.155	1.555	1.686	1.651
女性ダミー			-0.007	0.163								
等価世帯所得 (対数)			0.097	0.018 ***			0.106	0.030 ***			0.097	0.025 ***
就労状況												
就業(ref)												
失業中			-0.009	0.300			0.178	0.431			-0.274	0.429
非就労			0.079	0.199			-0.055	0.296			0.049	0.282
年齢階級												
65~69歳(ref)												
70歳代			-0.104	0.179			-0.002	0.274			-0.271	0.247
80歳代			0.440	0.227			0.578	0.424			0.261	0.282
90歳代			0.877	0.428 *			0.439	0.700			1.142	0.544 *
婚姻状況												
未婚			-0.466	0.393			-0.468	0.467			-0.340	0.801
既婚(ref)												
死別			0.175	0.374			0.131	0.447			0.414	0.774
離別			-0.615	0.385			-0.529	0.455			-0.595	0.795
会話頻度												
ほとんど話をしない			-0.780	0.393 *			-0.683	0.564			-0.999	0.564
1か月に1回			-0.144	0.574			-0.178	0.743			-0.310	0.978
2週間に1回			-0.627	0.545			-0.381	0.790			-0.888	0.794
4~7日 (1週間) に1回			-0.933	0.285 **			-1.168	0.399 **			-0.551	0.420
2~3日に1回			-0.411	0.185			-0.253	0.305			-0.505	0.237 *
毎日(ref)												
会話人数												
0人			0.489	1.005			-0.714	1.150			3.479	2.099
1~4人			-0.197	0.321			-0.346	0.483			-0.118	0.436
5~9人			0.016	0.289			-0.202	0.449			0.186	0.390
10~20人			0.447	0.266			-0.280	0.408			1.017	0.363 **
21~49人			0.551	0.309			0.122	0.522			0.826	0.399 *
50人以上(ref)												
/cut1	-2.196	0.135	-2.285	0.461	-2.042	0.200	-2.661	0.612	-2.338	0.185	-2.010	0.857
/cut2	-0.431	0.093	-0.308	0.448	-0.248	0.142	-0.649	0.589	-0.567	0.124	0.022	0.844
/cut3	2.542	0.151	2.974	0.469	2.652	0.250	2.535	0.616	2.479	0.190	3.466	0.868
/cut4	4.462	0.344	4.931	0.563	5.660	1.005	5.593	1.153	4.107	0.371	5.143	0.927
調整済 R 二乗	0.005		0.076		0.008		0.079		0.005		0.090	

*<.05, **<.01, ***<.001

まず、男女を同時に分析した結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、「その他」のみが有意な正の効果を示している。共変量を投入した場合は、この効果の有意性は消失する。統制変数については、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は有意な効果を示していない。年齢階級は、「90歳代」が「65~69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していな

い。会話頻度は、「ほとんど話をしない」と「4~7日 (1週間) に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

次に、男女別の分析である。説明変数のみを投入した場合、男性、女性どちらについても、説明変数の有意な効果は確認されない。共変量を統制したモデルでも同様である。統制変数については、男女ともに等

価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は、男女ともに有意な効果を示していない。年齢階級は、女性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は、男女どちらについても有意な効果を示していない。会話頻度は、男性については、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を、女性については「2～3日に1回」が有意な負の効果を示している。会話人数は、女性についてのみ「10～20人」と「21～49人」が「50人以上」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。

4 日常のちょっとした手助け

4.1 「頼れる人の有無」の効果

表10は「いざという時のお金の援助」に関する「頼れる人の有無」を説明変数とした分析結果を示している。

まず、男女を同時に分析結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、「いない」「頼らない」ともに有意な負の効果を示している。共変量を投入した場合、「頼らない」の効果の有意性は消失し、「いない」の有意な負の効果のみが維持される。統制変数については、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は有意な効果を示

していない。年齢階級は、「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は有意な効果を示していない。会話頻度は、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。つづいて、男女別の分析結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、男性については「いない」が有意な負の効果を、女性については「いない」「頼らない」のどちらもが有意な負の効果を示している。共変量を統制した場合、男性、女性ともに説明変数の効果は有意ではなくなる。統制変数については、男女ともに等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況は、有意な効果を示していない。年齢階級は、女性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。婚姻状況は、有意な効果を示していない。会話頻度は、男性についてのみ、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数については、女性についてのみ「10～20人」と「21～49人」が「50人以上」を参照カテゴリとして有意な正の効果を示している。

表 10 「頼れる人の有無」の効果（日常のちょっとした手助け）

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)							
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2					
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.				
頼れる人の有無（手助け）																
いる(ref)																
いない	-1.111	0.197	***	-0.563	0.224	*	-0.939	0.263	***	-0.517	0.294	-1.145	0.326	***	-0.556	0.363
頼らない	-0.469	0.221	*	-0.065	0.237		-0.046	0.330	0.271	0.360	-0.774	0.302	*	-0.349	0.328	
女性ダミー				-0.071	0.165											
等価世帯所得（対数）				0.098	0.018	***			0.099	0.030	**			0.100	0.025	***
就労状況																
就業(ref)																
失業中				-0.009	0.299				0.146	0.429				-0.253	0.429	
非就労				0.068	0.199				-0.095	0.297				0.032	0.283	
年齢階級																
65～69歳(ref)																
70歳代				-0.135	0.180				-0.077	0.277				-0.270	0.246	
80歳代				0.362	0.228				0.428	0.428				0.216	0.282	
90歳代				0.866	0.423	*			0.315	0.695				1.207	0.530	
婚姻状況																
未婚				-0.429	0.389				-0.491	0.465				-0.296	0.789	
既婚(ref)																
死別				0.167	0.372				0.067	0.443				0.399	0.766	
離別				-0.579	0.381				-0.585	0.455				-0.573	0.784	
会話頻度																
ほとんど話をしない				-0.559	0.393				-0.465	0.564				-0.792	0.573	
1か月に1回				0.099	0.583				0.082	0.743				-0.061	0.991	
2週間に1回				-0.545	0.549				-0.296	0.797				-0.755	0.801	
4～7日（1週間）に1回				-0.861	0.290	**			-1.198	0.401	**			-0.374	0.431	
2～3日に1回				-0.304	0.186				-0.130	0.305				-0.370	0.242	
毎日(ref)																
会話人数																
0人				0.695	1.004				-0.582	1.140				3.810	2.111	
1～4人				-0.144	0.321				-0.269	0.479				-0.097	0.437	
5～9人				0.056	0.288				-0.187	0.443				0.207	0.391	
10～20人				0.485	0.266				-0.225	0.407				1.021	0.363	*
21～49人				0.551	0.309				0.189	0.520				0.808	0.399	*
50人以上(ref)																
/cut1	-2.528	0.141		-2.328	0.458		-2.325	0.219	-2.745	0.613		-2.635	0.186	-2.033	0.848	
/cut2	-0.706	0.091		-0.332	0.443		-0.492	0.156	-0.718	0.587		-0.813	0.113	0.018	0.834	
/cut3	2.312	0.143		2.939	0.465		2.435	0.250	2.445	0.614		2.269	0.174	3.455	0.859	
/cut4	4.211	0.337		4.873	0.558		5.448	1.005	5.500	1.152		3.873	0.358	5.112	0.918	
調整済 R 二乗	0.020			0.077			0.020		0.080			0.017		0.092		

*<.05, **<.01, ***<.001

4.2 「頼れる人は誰か」の効果

続いて、「頼れる人は誰か」の効果进行分析した結果を表 11 に示す。

まず、男女を同時に分析した結果である。説明変数のみを投入したモデルでは、いずれの説明変数も有意な正の効果を示していない。共変量を投入した場合も、いずれの説明変数についても有意な効果は看取されない。統制変数については、等価世帯所得が有意な正の効果を示している。就労状況、年齢階級、婚姻状況は有意な効果を示して

いない。会話頻度は、「4～7日（1週間）に1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有意な負の効果を示している。会話人数は、有意な効果を示していない。

次に、男女別の分析である。説明変数のみを投入した場合、男性についてはいずれの説明変数も有意な効果を示していない一方、女性については「家族・親族」が有意な正の効果を示している。共変量を統制したモデルでも、男性についてはいずれの説明変数も有意な効果を示さない一方、女性

については「家族・親族」の有意な正の効果
が維持されている。統制変数については、
男女ともに等価世帯所得が有意な正の効果
を示している。就労状況は、男女ともに有
意な効果を示していない。年齢階級は、女
性についてのみ「90歳代」が「65～69歳」
を参照カテゴリとして有意な正の効果を示
している。婚姻状況は、男女どちらについ

ても有意な効果を示していない。会話頻度
は、男性については、「4～7日（1週間）に
1回」が「毎日」を参照カテゴリとして有
意な負の効果を示している。女性については「2～3日
に1回」が有意な負の効果を示している。
会話人数については、女性についてのみ「10
～20人」が「50人以上」を参照カテゴリと
して有意な正の効果を示している。

表 11 「頼れる人は誰か」の効果（日常のちょっとした手助け）

被説明変数： 現在の暮らし向き	男女計 (N=727)				男性 (N=285)				女性 (N=442)					
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2			
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.		
頼れる人は誰か（手助け）														
家族・親族	0.751	0.150	0.312	0.166	0.314	0.249	-0.095	0.290	0.974	0.198	***	0.587	0.217	**
友人・知人	0.173	0.182	0.169	0.194	0.047	0.302	0.160	0.326	0.279	0.230		0.308	0.250	
近所の人	-0.063	0.200	-0.234	0.207	0.223	0.369	0.082	0.389	-0.218	0.243		-0.389	0.254	
職場の人	0.030	0.596	-0.060	0.625	0.685	0.859	0.225	0.923	-0.528	0.814		-0.143	0.875	
民生委員・福祉の人	0.463	0.383	0.546	0.392	0.248	0.591	0.562	0.629	0.613	0.511		0.403	0.545	
その他	0.804	0.543	0.565	0.563	1.679	1.021	1.443	1.064	0.319	0.653		0.009	0.685	
女性ダミー			-0.028	0.164										
等価世帯所得（対数）			0.099	0.019	***		0.112	0.030	***			0.096	0.025	***
就労状況														
就業(ref)														
失業中			0.016	0.303			0.194	0.432				-0.186	0.438	
非就労			0.051	0.204			0.000	0.302				-0.011	0.287	
年齢階級														
65～69歳(ref)														
70歳代			-0.109	0.180			-0.071	0.279				-0.262	0.248	
80歳代			0.377	0.231			0.525	0.430				0.258	0.288	
90歳代			0.800	0.433			0.339	0.711				1.251	0.541	*
婚姻状況														
未婚			-0.465	0.390			-0.518	0.468				-0.415	0.799	
既婚(ref)														
死別			0.163	0.373			0.111	0.449				0.302	0.776	
離別			-0.569	0.383			-0.542	0.461				-0.639	0.794	
会話頻度														
ほとんど話をしない			-0.617	0.394			-0.569	0.564				-0.753	0.570	
1か月に1回			0.040	0.578			-0.141	0.746				-0.037	0.986	
2週間に1回			-0.583	0.549			-0.351	0.793				-0.944	0.811	
4～7日（1週間）に1回			-0.847	0.287	**		-1.203	0.395	**			-0.211	0.435	
2～3日に1回			-0.306	0.187			-0.212	0.306				-0.317	0.243	
毎日(ref)														
会話人数														
0人			0.596	1.007			-0.617	1.153				3.673	2.111	
1～4人			-0.185	0.320			-0.272	0.490				-0.155	0.441	
5～9人			0.020	0.288			-0.202	0.450				0.141	0.395	
10～20人			0.457	0.266			-0.258	0.412				0.945	0.371	*
21～49人			0.535	0.309			0.112	0.526				0.755	0.402	
50人以上(ref)														
/cut1	-1.823	0.143	-2.044	0.461	-1.820	0.202	-2.490	0.622	-1.829	0.204		-1.755	0.853	
/cut2	-0.014	0.112	-0.054	0.448	-0.027	0.155	-0.489	0.602	0.011	0.162		0.315	0.842	
/cut3	3.031	0.174	3.236	0.473	2.921	0.271	2.711	0.633	3.159	0.236		3.793	0.869	
/cut4	4.933	0.352	5.171	0.564	5.951	1.012	5.792	1.165	4.770	0.393		5.459	0.926	
調整済 R 二乗	0.021		0.078		0.013		0.079		0.029			0.099		

D 考察

本稿では、「重要な事柄の相談」「愚痴を

聞いてくれること」「喜びや悲しみを分かち合うこと」「いざという時のお金の援助」「日頃のちょっとした手助け」「日頃のちょっとした手助け」の5項目についての「頼れる人の有無」および「頼れる人は誰か」が、単身高齢者の暮らし向きにどのような影響を与えているのかについて検討してきた。

説明変数については、一貫した効果を看取することはできなかった。「頼れる人の有無」の効果についての分析では、説明変数のみを投入した場合、いずれの項目についても「いない」の有意な負の効果が示されたものの、共変量を統制した場合、その効果は消失するか維持されるかは、項目によって異なっていた。また、「頼れる人は誰か」についても、説明変数の効果は一貫したものではなかった。

以下ではすべての分析結果を踏まえ、重要と考えられる点を3つ指摘したい。

第1に、いずれの分析についても、等価世帯所得は一貫して有意な正の効果を示していた。このことは、「頼れる人の有無」や「頼れる人は誰か」といった事柄よりも、世帯所得が直接的に単身高齢者の暮らし向きに影響を与えていることを意味するものである。当たり前と言えば当たり前かもしれないし、後述のように本稿の分析はいくつかの限界も有しているため、この結果についての過度な解釈は控えるべきである。だが、単身高齢者の暮らし向きを改善させる施策としては、地域における互助の推進や居場所づくりといったものよりも、経済的な支援を拡充した方が効率的である可能性が示唆されたということはあるだろう。

第2に、「頼れる人がいる」と回答しているものに限定してみても、「家族・親族」の

効果はそこまで頑健ではない。共変量を統制した後も「家族・親族」の有意な効果が維持されたのは、男女を合わせた場合については「重要な事柄の相談」と「分かち合い」のみである。また、男女別にみても、「家族・親族」の有意な効果が維持されたのは、女性については「重要な事柄の相談」「日常のちょっとした手助け」の2項目のみであり、男性についてはいずれの項目もこの変数の有意な効果は確認されなかった。家族は高齢者介護の「含み資産」とみなされてきたのは先述のとおりであるし、現在でも日本においては「介護は家族が行うべき」との規範が存在しているが、すくなくとも本稿での分析結果にもとづけば、家族や親族を頼れることは単身高齢者個人の暮らし向きの改善につながるものとはいえない。

第3に、会話人数や会話頻度といった、これまでネットワークの多寡の指標として用いられてきた変数に関しては、係数の向き、有意性ともに一貫した効果はほとんど確認されなかったが、唯一、男性の場合、全ての分析において会話頻度が「4~7日」が有意な負の効果が示された。この結果は、ほとんど他人と話をしていない層ではなく、1週間のうち1日弱程度他人と会話する者の暮らし向きがよくないことを意味するものである。この結果についても過度な解釈は控えるべきであるが、可能性としては、日雇いなどの不安定な就労についている者が、この1週間に「4~7日」他人と会話する層に当てはまるということかもしれない。逆に、「ほとんど話をしない」という層は、他者とかかわらずとも生活を維持していける資源を有しており、積極的に「孤立」を

選択しているそうであるという可能性もあるだろう。いずれにしても、この会話頻度の効果については、それぞれの値に含まれるのがどのような層なのかを考える必要があるのかもしれない。

E 結論

先の考察を踏まえれば、本稿の結論は以下の通りになる。まず、単身高齢者の暮らし向きを改善させる施策としては、経済的な支援を優先して拡充することが有効でありうる。次に、家族や親族は単身高齢者の暮らし向きを改善させるのに有効な存在とは必ずしもいえない。最後に、1週間に「4～7日」他人と話をしている層について、その社会経済的な状況をより詳細に分析する必要がある。

本稿に残された課題は以下の3点である。第1に、都市化の度合いによって高齢女性が有するネットワークや得られるサポートに差があるとの議論が先行研究ではなされているが(野辺 2001; 野邊 2013)、本稿においてはデータの制約から都市の規模をコントロールできていない。第2に、そもそも等価世帯所得が高い単身高齢者に共通する属性が存在している可能性もあるが、本稿ではその点を分析モデルに含められていない。傾向スコアマッチング法などを用い、そうしたバイアスをコントロールした上で、本稿の議論は再検証される必要がある。第3に、本稿では個人の志向性もコントロールできていない。個人が有するネットワークやサポートの多寡は、人間関係に対する個人の志向性に規定される部分がある(大和 1996)。そうした志向性の効果や、志向性に社会経済的地位が与える影響も考慮す

る必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

- 青木邦男、1997、「高齢者の抑うつ状態と関連要因」『老年精神医学雑誌』8: 401-10。
- 藤崎宏子、1998、『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館。
- Hashimoto, K., H. Kurta, T. Haratani, K. Fujii, T. Ishibashi 1999, Direct and Buffering Effects of Social Support on Depressive Symptoms of the Elderly with Home Help, *Psychiatry Clin Neurosci*, 53: 95-100.
- 原田謙・杉澤秀博・浅川達人・斎藤民、2005、「大都市部における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康」『社会学評論』55(4): 434-48。
- 稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人、2016、「2000年前後の家族動態」『日本の家族 1999-2009——全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学』東京大学出版会、3-21。
- 石田光則、2011、『孤立の社会学』勁草書房。
- 小林江里香・深谷太郎・杉原陽子・秋山弘子・Liang Jersey、「高齢者の主観的ウェルビーイングにとって重要な社会的ネットワークとは——性別と年齢による差異」『社会心理学研究』29(3): 133-45。
- 小林江里香・藤原佳典・深谷太郎・西真理子・斉藤雅茂・新開省二、2011、「孤立高齢者におけるソーシャルサポートの利用可能性と心理的健康——同居者の有無と性別による差異」『日本公衆衛生雑誌』58(6): 446-456。
- 小林江里香・Liang Jersey、2011、「高齢者

- の社会的ネットワークにおける加齢変化とコホート差——全国高齢者縦断調査データのマルチレベル分析』『社会学評論』 62(3): 356-74。
- 小山弘美、2012、「パーソナル・ネットワークからみた高齢者の孤立と地域の役割」『社会学論考』 33: 1-27。
- 増地あゆみ・岸玲子、2001、「高齢者の抑うつとその関連要因についての文献的考察——ソーシャルサポート・ネットワークとの関連を中心に」『日本公衆衛生雑誌』 48(6): 435-48。
- 俣野美咲、2018、「成人子と親の援助関係に関する研究動向と展望」『武蔵文化論叢』 18: 21-35。
- 野辺政雄、1997、「高齢女性の社会的ネットワークとソーシャルサポート——世帯類型と年齢別分析」『ソシオロジ』42(2): 65-85。
- 、1999、「高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて」『社会学評論』50(3): 375-92。
- 、2001、「都市化が高齢女性のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートに与える影響」『日本都市社会学年報』 19: 123-39。
- 野邊政雄、2013、「過疎山村に住む高齢女性のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポート」『地域社会学年報』 25: 61-75。
- 宍戸邦章、2001、「高齢期パーソナル・ネットワーク研究における分析視点の動向——1990年を境として」『同志社社会学研究』 5: 135-46。
- 、2005、「都市郊外における高齢者の社会的ネットワーク——ネットワーク構造と生活機能外部化の関連について」『同志社社会学研究』 9: 41-56。
- 白波瀬佐和子、2005、「高齢社会にみる格差——高齢層における所得格差と支援ネットワークに着目して」『社会学評論』 56(1): 74-92。
- 高橋和子・工藤啓・山田嘉明・邵力・石川仁・深尾彰、2008、「生活習慣病予防における健康行動とソーシャルサポートの関連」『日本公衆衛生雑誌』 55(8): 491-502。
- 上野千鶴子、2007、『おひとりさまの老後』法研。
- 、2009、『男おひとりさま道』法研。
- 、2011、『ケアの社会学——当事者主権の福祉社会へ』太田出版。
- 、2012、『みんな「おひとりさま」』青灯社。
- 、2015、『おひとりさまの最期』朝日新聞出版。
- 大和礼子、1996、「中高年男性におけるサポート・ネットワークと『結びつき志向』役割との関係——ジェンダー・ロールの視点から」『社会学評論』 47(3): 350-65。

F 健康危険情報

特に記載すべき点はない。

G 研究発表

なし。

H 知的財産権の出願・登録状況

なし。